

## 使徒の働き16章6－10節 「道を曲げる神」

### 1A 曲げる中で展開するご計画

1B 使徒の働き

2B 族長の歴史

### 2A 禁じられる御靈 6－7

1B 語ることの禁止 6

2B イエスの御靈 7

### 3A 歐州への宣教 8－10

1B 選択肢のないトロアス 8

2B マケドニア人の懇願 9

3B ルカの同行 10

## 本文

使徒の働き 16 章を開いてください。私たちは、前回、パウロヒシラスが、第二回目の宣教旅行に出ているところを見ました。そこでのもっと大きな出来事は、パウロの信仰の息子となり、また、心と思いを人に対する同労者、テモテが与えられたことです。そして、テモテが、ユダヤ人の母を持ち、父がエジプト人だったので、ユダヤ人の手前、割礼を受けたことなどから、宣教において、つまずきの石を置かないこと、大事なことのために、二義的なことは横に置くことの大切さも見ました。

今日は、その続きになります。まず全体を読んでみましょう。<sup>6</sup> それから彼らは、アジアでみことばを語ることを聖靈によって禁じられたので、フリュギア・ガラテヤの地方を通って行った。<sup>7</sup> こうしてミシアの近くまで来たとき、ビティニアに進もうとしたが、イエスの御靈がそれを許されなかった。<sup>8</sup> それでミシアを通って、トロアスに下った。<sup>9</sup> その夜、パウロは幻を見た。一人のマケドニア人が立って、「マケドニアに渡って来て、私たちを助けてください」と懇願するのであった。<sup>10</sup> パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニアに渡ることにした。彼らに福音を宣べ伝えるために、神が私たちを召しておられるのだと確信したからである。

パウロヒシラスは、そのまま、いわゆるアナトリアと呼ばれるところ、今のところで宣教を続けるつもりでした。ところが、二度も、「聖靈が禁じられた」「御靈が許さなかった」と出てきます。そして、幻の中で、マケドニア人が助けてくれと懇願しているのを見ます。そして、トロアスからマケドニアに向けて船出するのです。マケドニアは、今のギリシア北部です。

ついに、ここから欧州に向けての宣教が始まるのです。今でも、トルコのイスタンブールでは、ボスポラス海峡を挟んで、東をアジア、西をヨーロッパと呼び、「今日はアジアに行ってきた」という

会話が日常で行われています。このように、トルコは東西文明の悠久の歴史を抱いている国ですが、アナトリア半島がアジアですが、黒海から、ボスポラス海峡、マルマラ海、そして、ダーダネルス海峡を経て、エーゲ海に至るところが、水で分かたれています。その東がアジアであります、西が欧州です。パウロが、タルソからマケドニアに渡った時に、ついにこの海の境を渡って福音を宣べ伝えたわけです。

これが、キリスト教会の歴史を全て変える、主のみこころがありました。その後の教会は、欧洲を中心にして発展します。東方に対しても、すなわち中東から中央アジア、それから東アジアへ渡る歴史も、あることにはありますが、大半が、西方、すなわち欧洲から世界中に福音がその後、広がっていくことになります。そのきっかけになるのが、聖霊がパウロにアジア地方での宣教をこの時にお許しにならないというところだったのです。

### 1A 曲げる中で展開するご計画

主が、みことばを語ろうとしているパウロたちを、どうして禁じるということろまでしたのか？ここ箇所を思い巡らした時に、使徒の働き全体、そして聖書全体にある、神の御思いが分かってきました。伝道者の書に、このような言葉があります。「7:13-14 神のみわざに目を留めよ。神が曲げたものをだれがまっすぐにできるだろうか。14 順境の日には幸いを味わい、逆境の日にはよく考えよ。これもあれも、神のなさること。後のことを見人に分からせないためである。」主が、道を曲げられることがあるということです。それは、神のみわざに目を留めるためであり、曲げること、すなわち逆境によって、次に何が起こるかを分からないようにさせ、それで、神のみわざに目を留めるようになる、ということです。

### 1B 使徒の働き

これまで、使徒の働きを学んでいる中で、主がなぜ、こんなことをお許しになるのだろうか？と思ったことがあります。その大きな一つが、ステパノの殉教です。主が、それまで、ペテロが牢に入れられても、御使いによって助け出されました。しかし、ステパノの時は石打で死んだのです。弟子たちは、彼を葬って悲しんでいます。どうして、そんなことをお許しになったのか？と思います。

それは、その後の話を見れば、自ずと分かります。福音が広がっていくため、しかも、エルサレムから、ユダヤまたサマリアに、そして地の果てにまで、イエスの証人となるという、主ご自身の約束が実現していくためです。この殉教によって、エルサレムにいる兄弟たちは散っていました。そして、ピリポはサマリア人たちに福音を宣べ伝えました。そして、その他の人たちは、フェニキアを北上し、アンティオキアに来た時には、ギリシア語を話す人々にも福音を語りました。それで、異邦人がイエスを自分の主として信じて、弟子となっていました。

ペテロも、主によって道を曲げられました。それは、幻によって、食べてはならないとされていた

獸が、天から風呂敷で降りてきて、「屠って、食べなさい」と言われるのです。ペテロは、三度も、拒みました。けれども、主が、「ご自身がきよめたものを、汚れていると言ってはならない」とされました。ペテロが分からぬでいると、カイサリアのコルネリウスに、御使いが現れて、ペテロを招きなさいと命じられていたのです。それで、そこから遣わされた人々についていって、彼の家で食事をして、福音を宣べ伝えたのです。彼らが、みことばを聞いているうちに、聖靈が臨まれ、彼らは預言や異言を語りました。

このことがあったので、パウロとバルナバの宣教で異邦人が救われていったという、神の恵みを、エルサレムの教会は、反対者がいたものの、一同に受け入れていくことができました。こうやって、主は、人々がこうだと思って行っているところで、その道を曲げられて、ご自分のみわざに目を留めさせる、ということを行われるのです。

## 2B 族長の歴史

そう考えますと、私たちが日曜日に聖書通読の学びで見ていっている、創世記の族長の歩みにも合点が行きます。どうして、主は、イシュマエルではなく、サラから生まれる子、イサクに約束を受け継がせたのか？さらに、イサクからの双子で、エサウではなくヤコブを選ばれたのか？それから、ユダの子どもで、なんと彼の嫁のタマルをとおして双子が生まれますが、初めに出てきた子ではなく、手を引っ込みて、割り込んできたペレツに、約束が受け継がれたのか？さらに、ヤコブの息子ヨセフが、エジプトで宰相となり、そこで生まれた子、マナセとエフライムですが、マナセが兄だったのに、ヤコブは手を交差させて、エフライムを先にして祝福しました。すべて、先に生まれた者ではなく、次に生まれた者が選ばれていくのです。

## 2A 禁じられる御靈 6-7

### 1B 語ることの禁止 6

<sup>6</sup> それから彼らは、アジアでみことばを語ることを聖靈によって禁じられたので、フリュギア・ガラテヤの地方を通って行った。

ここからは、宣教旅行の地図を見ることをお勧めします。パウロとシラスは、デルベトリステラに行きました。リカオニア地方です。それから、町々を巡ったことが書かれています。ピシティアのアンティオキアにも戻って来たことでしょう。

それから南西には、大きくアジア地方があります。今では、トルコ西部と呼べばよいでしょう。エーゲ海に面する地域です。そこに、後に、イエスが七つの教会に対して、お語りになりました。エペソを始めとして、スマルナ、ペルガモン、ティアティラ、サルディス、フィラデルフィア、そして、ラオディキアです。ラオディキアのすぐそばに、ヒエラポリスとコロサイがあり、コロサイはフリュギアの西の端にある町です。ここに後に、パウロ自身もやってきます。エペソに長く留まり、その間に、アジ

ア全体に、みことばが広がっていきます。アジアは、大きな人口を抱える地域です。そこに、パウロが福音を宣べ伝えないわけがいかないと思うのは当然です。事実、後にエペソで長く滞在し、そこがテモテやヨハネなど、多くの指導者の拠点となっていました。

ところが、今、「[アジアでみことばを語ることを聖靈によって禁じられた](#)」とあります。これが、どのようななかたちで行われたのかは、書かれていません。かつて、シリアのアンティオキアでは、聖靈が語られたときは、預言によってあることが分かっています。

あるいは、病気にかかったのかもしれません。ここに、「[フリュギア・ガラテヤの地方を通って行った](#)」とあります。パウロが、そこで教会を建て上げていったことは、ここ使徒の働きを見ると記されていませんが、彼が確実に、ここを訪れ、福音を語ったことは、ガラテヤ人の手紙には書かれています。そこで、彼の目に何か支障が出していました。「4:14 そして私の肉体には、あなたがたにとって試練となるものがあったのに、あなたがたは軽蔑したり嫌悪したりせず、かえって、私を神の御使いであるかのように、キリスト・イエスであるかのように、受け入れてくれました。」そして、目をえぐり出して、彼に与えようとさえしたことも書いてあります。ということは、彼の目に何かができることが、よくわかります。この手紙の終わりには、自筆で、大きな文字で書いています。目が良く見えなかったのかもしれません。

主が、そのような肉体の弱さをお許しになられて、アジアに行くことを断念させて、それで、北のほう、フリュギア・ガラテヤ地方に行かせたということはあり得ます。

## 2B イエスの御靈 7

<sup>7</sup> こうしてミシアの近くまで来たとき、ビティニアに進もうとしたが、イエスの御靈がそれを許されなかつた。

フリュギア・ガラテヤ地方の上には、ミシア地方があります。さらに北上しますと、ビティニア地方です。黒海の面する地方です。ここも、非常に人口の多いところです。行かない手はありません。ペテロ第一の手紙の書き出しへ、この地域のことも言及されています。「1:1 イエス・キリストの使徒ペテロから、ポンツ、ガラテヤ、カпадキア、アジア、ビティニアに散って寄留している選ばれた人たち、」この地域一帯に、福音が広がり、教会も建て上げられました。ですから、またもや、パウロとシラスが、ここで福音を伝えようと思っても、何らおかしくないです。

ところが、「[イエスの御靈がそれを許されなかつた](#)」とあります。初め、アジアに行こうとすると、聖靈がそれを禁じられたとあり、ビティニアのほうに進もうとすると、それをお許しにならなかつたとあります。主が、「絶対にアジアではないのだ」という、強いみこころがあり、そこからまるで道案内するかのように、「ビティニアのほうでもないのだ」と言われている感じがします。そして、「聖靈」では

なく、「イエスの御靈」とあります。主イエスご自身が、御靈によってパウロたちに、強く促しておられるのだと読みます。

### **3A 欧州への宣教 8-10**

#### **1B 選択肢のないトロアス 8**

<sup>8</sup>それでミシアを通して、トロアスに下った。

ここが、パウロが、とても試されていたところではないでしょうか？南東アジアに行くのも、禁じられています。次に、ビティニアに行くのも許されませんでした。だから、他はミシアを通して、エーゲ海に面するトロアスに行くしかなかったのです。トロアスは、ギリシャ・ローマ時代に発達した町です。ローマ時代には、主要な港町として繁栄しました。私たちは 2018 年のトルコ・ギリシアの旅でここを訪れましたが、何もない海岸で、ただ父子が釣りをしているだけでした。しかし、海岸には石が並んでいるところがあり、それが防波堤だったのです。今も広大に、公衆浴場、劇場、競技場などの遺跡が眠っていると言われています。

パウロは、他には行くべきところが見つからなかったのです。ちょうど、これは、イスラエル民が、紅海の岸边に連れていかれた時のようなものです。「出 14:2 「イスラエルの子らに言え。引き返して、ミグドルと海の間にあるピ・ハヒロテに面したバアル・ツェフオンの手前で宿営せよ。あなたがたは、それに向かって海辺に宿営しなければならない。」エーゲ海の港町しか行けず、けれども、どん詰まりになってしまっているという感じです。

#### **2B マケドニア人の懇願 9**

<sup>9</sup>その夜、パウロは幻を見た。一人のマケドニア人が立って、「マケドニアに渡って来て、私たちを助けてください」と懇願するのであった。

パウロが、主にお会いする時、しばしば夜であることが分かります。夜に主がよこに立っておられて、恐れてはならない、などと語られました。夜、静かな時であります。また、夜は、自分には分からなくなっている時、落胆している時もあります、恐れている時もあります。前が見えない時です。

けれども、そこで主が啓示をしばしば、くださるのです。私たちは、見えなくなる時を恐れます。しかし、その時こそ、主のみわざに目を留める時なのです。伝道者の書にあるように、主のみわざに目を留めるのは、私たちが分からなくなったりした時ですね。私たちは、自分が見えていると思っている時は、主が見ているように見ることができなくなっています。

「マケドニア」とあります。地図を見ていただければわかりますが、当時、ギリシアという国はありませんでした。あくまでも、文化や領域の名称としてのギリシアです。具体的な地名は、北のマケド

ニアです。そして南に、アカイアがありました。アカイアにアテネやコリントがあります。

幻の中に、マケドニア人が現れました。そして、「懇願」とありますが、ほとんど要求に近い、強い言葉です。要請と言う感じでしょう。助けてくださいと、強く促しているのです。こうやって、主は時に、幻や夢によって私たちを導かれます。主は今も、時に夢や幻の手段を使われます。私たちも、カルバリー・チャペルのカンファレンスで、静かに祈りの中で幻に示された男女が、私たち夫婦のことを探っていて、幻が示されて、それを分かち合っておられました。大体、その通りになっています。

けれども、主はどちらも使われます。聖霊が禁じられるとか、御霊がお許しにならないというの、どのようななかたちだったのか、分かりません。でも病気だったということも考えられます。そして幻のようななかたちでも、主は導かれます。どちらかだけなのだ、というのが間違っています。大事なのは、いつも祈り心を持っていることです。主が次に、何を願っておられるのかを、祈り、願い求めているのです。そして、次に御霊の導かれるのと、主のしもべとして待っているのです。それを、見失って、自分の思うところにしたがって動くことは、神の子どもとしてふさわしくありません。「ロマ8:14 神の御霊に導かれる人はみな、神の子どもです。」

### 3B ルカの同行 10

<sup>10</sup> パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニアに渡ることにした。彼らに福音を宣べ伝えるために、神が私たちを召しておられるのだと確信したからである。

ここに、パウロが主を待ち望んでいたことが、よくわかります。「私たちはただちにマケドニアに渡ることにした」とありますね。ただちに、なのです。もし、彼が祈っておらず、導きを求めていなかつたら、この幻について、思いあぐねるだけで、すぐにこのように意思決定できなかつたはずです。

そして、神が自分たちを召しておられると確信したとあります。これが、大きなことです。パウロにとっての守備範囲と言いましょうか、福音宣教の範囲は、アジア辺りまでだったのです。エーゲ海を越えた、欧洲には向かっていなかったのです。主は、私たちが思うところを越えて、願いをかなえられる方です。「エペ3:20 私たちのうちに働く御力によって、私たちが願うところ、思うところのすべてをはるかに超えて行うことのできる方」

自分が自分で守備範囲を決める、コントロールができる、手中に収めておくということを、私たちはしたいのです。けれども、聖霊はそれをお許しになりません。聖霊の働きにおいて、私たちが試されるのはこの部分です。異言の賜物は、とても知性において抵抗があります。自分が舌の動きを制することができないのです。しかし、御霊に自分を任せます。同じように、聖霊の働き全体においても、私たちの思いを超えて、神は行われます。ここに対して、心を開いておかないといけません。その時に、分からぬことを主は許されます。ご自分のわざに目を留めるためです。